

18世紀のサッポーたち

川津 雅江

名古屋経済大学・法学部 助教授

I

サッポーは紀元前7世紀の終わり頃から6世紀にかけてギリシャのレスボス島に住み、プライベートな愛とか嫉妬を一人称で唄った最初の抒情詩人として有名な女性であるが、実のところ彼女について現在知られていることは彼女の時代よりもずっと後の情報によってである。サッポーの詩は彼女の死後数世紀たって、アレクサンドリアの学者によって九巻本にまとめられ、そこには500編以上の詩が収められていたらしい(Barnstone 274)が、現存しているのはわずか192の断片のみで、それらはすべて古代の注釈書や19世紀末にエジプトで発見されたパピルスなどから寄せ集められたものだ。彼女の生涯についてはもっと不確かで、彼女よりはるか後世の文典家や注釈者や歴史家たちによる様々な、時に矛盾する証言が今日まで伝わっているにすぎない。

しかし、あまりにも情報が欠如しているからであろう。西洋の伝統において、サッポーほど人々の想像力をかき立てて、夥しい数のフィクションを生み出させた詩人はいないし、彼女の詩ほど後世の詩人たちによって模倣され続けた詩はない。最近の研究は、こうしたサッポーの詩や彼女の伝説がどのように受け継がれてきたかを探る方向にある。たとえば、ジョアン・デジアンの『サッポーのフィクション』(1989)はフランスにおけるサッポーの受容史を考察しているが、英文学の分野でも、エレン・グリーン編集によるサッポーの受容史についての論集(1996)、19世紀中心のヨーピィ・プリンズの『ヴィクトリアン・サッポー』(1999)、17世紀中心のハリエット・アンドレアディスの『女性同性愛の文学的エロティックス』(2001)などの研究書が続々と出ている。本論ではこのような最近の研究動向にそって、18世紀のイギリスにおいて女性詩人たちが賞賛されるときも攻撃されるときも「サ

ッポー」と呼ばれた現象を取り上げ、同時代に伝わっていたサッポーのイメージがいかに才能ある女性に対する男性側の偏見や嫌悪や女性蔑視の産物であったかを明らかにしたい。

II

「サッポー」と呼ばれた女性詩人たち、あるいは自ら「サッポー」と名乗る女性詩人たちがいたことは、何も18世紀のイギリスだけに見出される現象ではない。たとえば、17世紀のフランスでは、マドレイヌ・ド・スキュデリイが「フランスのサッポー」として有名だったし、イギリスでもキャサリン・フィリップスが最初の「イギリスのサッポー」としてもてはやされていた。18世紀には「スエーデンのサッポー」、「ロシアのサッポー」、「ドイツのサッポー」などもいた(Reynolds 8)。19世紀以降も、イギリスのL. E. L. やクリスティーナ・ロセッティなどをはじめとして、フランス、ドイツ、アメリカ、ルーマニア、ロシア、ポーランドなど西洋諸国にそれぞれのサッポーたちがいたし、現代ですらもいる(Lipking 97)。最初の女性詩人としてのサッポーの名前はまさに西洋の女性の詩の伝統と共に生き続けていると言ってよい。そして、女性詩人にとて、「サッポー」の名前を頂くということは、非常な名誉であろう。何しろ、サッポーはプラトンによって「第10番目の詩神」として讃えられたと伝えられるのだから。

しかしながら、18世紀のイギリスに限って言えば、「サッポー」という名前は必ずしも女性詩人の最高の尊称であるとは限らなかった。いや、男性作家の間では、この名前を女性の詩的能力を偏見なく賞賛する場合に使うというよりもむしろ、その能力を貶め、抑圧するために使う傾向が強かった。これは、主としてオ

オウイディウスの『名高き女たちの手紙』の中の第15番目の「パオーンに宛てたサッポーの手紙」における女性詩人を貶めるようなイメージに起因するものである。そこで、18世紀に「サッポー」と呼ばれた女性たちを見る前にまず、オウイディウスのサッポー像を見ておこう。

オウイディウスがこの詩を書いた紀元後1世紀はじめ頃よりもずっと前、サッポーの死後2世紀位を経た紀元前4世紀にすでに、幾つかのギリシャ喜劇によって、サッポーが年下の美青年パオーンに失恋して、レフカスの岩上から海へと飛び降りて亡くなったという話が描かれていたが、この話は長い間サッポーの死に関する真実の話として信じられていた。オウイディウスの詩はレフカスから飛び降りる直前にサッポーがパオーンに宛てて書いた書簡体型式の詩で、これが15世紀はじめに発見されたとき、サッポーの本物の手紙をオウイディウスがラテン語に翻訳したものと見なされたほどである。イギリスでは、16世紀中旬頃から『名高き女たちの手紙』の英訳版が幾つか出版されたので、オウイディウスのサッポー像が多くの人々に浸透していくことになる。アレグザンダー・ポープによって書かれた「パオーンに宛てたサッポーの手紙」(1707)は、今日知られている中で最も有名な翻訳であろう。

さて、オウイディウスの詩で描かれたサッポー像で注目すべきは、一つには、彼女がパオーンという一人の男性に夢中になる前に、100人以上の女性と同性愛関係にあったということ、今一つは彼女がもはや詩人ではなく、パオーンに捨てられてもなおかつ彼への愛を赤裸々に訴える単なる女性であるということである。オウイディウスのサッポーは自分の同性愛の相手として、アナクトリエ、キュドロ、アッティスという三人の女性の具体的な名前すらあげるけれども、パオーンに恋に落ちている今は、昔のように女性たちに心を奪われないと言う。そして、次のように、彼女らの愛は過去の恥辱であったと後悔する。

non oculis grata est Atthis, ut ante, meis,
atque aliae centum, quas hic sine crimine amavi....

(“my eyes joys not in Attis as once they did, nor in the hundred other maids I loved here to my reproach,” trans. Showerman)

オウイディウスはこのようにサッポーを同性愛から異性愛への転向者として描いているだけではない。同時に、叙情詩で有名なサッポーからその詩的な声を奪

い、彼女を詩人ではなく、男性に捨てられた単なる女性として描いた。パオーンへの愛が報われず、悲しみに沈むサッポーは何度も自分の詩的な声の喪失を嘆いている。彼女はもはや抒情詩人ではない。そして、このことは、次の引用が示すように、彼女がエレジー形式の書簡詩を書くということ自体に、すでに明示されているのである。

Forsitan et quare mea sint alterna requiras
carmina, cum lyricis sim magis apta modis.
flendus amor meus est — elegiae flebite Carmen;
non facit ad lacrimas barbitos ulla meas.

(“Perhaps, too, you may ask why my verses alternate, when I am better suited to the lyric mode. I must weep, for my love — and elegy is the weeping strain; no lyre is suited to my tears,” trans. Showerman)

同性愛の女性詩人から異性愛の単なる女性へと転向したサッポー。15世紀から16世紀に幾つか出版された『名高き女たちの手紙』によって、このオウイディウスのサッポー像が古典語を解する知識階級の間に普及したが、同時に、それらの本につけられていた注釈によって、同性愛者としてのサッポーの悪名が広がることになった。歴史上のレスボスのサッポーが果たして本当に同性愛者であったかは不明である。だが、古代から何度も引用され、翻訳されてきた彼女の二編の詩(「断片1」と「断片31」)とも女性への愛を唄ったものであり、オウイディウス以降の古代文献にも同性愛者としてのサッポーへの言及がある。たとえば、2世紀終わりか3世紀はじめ頃のパピルスに書かれたギリシャ語のサッポーの伝記によれば、彼女は「女性の愛人」(“a woman-lover”)として批判されたという(test. 1)。10世紀のビザンチンの百科辞典『スーダ』には、オウイディウスのサッポーを分割したような二人のサッポー、すなわちアッティス、テレスイッパ、メガラという三人の女性との間の「不純な友情によって悪名高い」同性愛詩人としてのサッポー(test. 2)とパオーンへの愛のためにレフカスから身を投げた異性愛詩人のサッポー(test. 3)の項がある。ルネサンス期のオウイディウスの注釈者らにとって、サッポーの同性愛は事実、それも「不名誉な」事実だった。一例を挙げると、『名高き女たちの手紙』の15世紀のベネツィア版や16世紀の大連版には、ドミティウス・カルデリヌスのラテン語の注釈が再録されたが、その注釈によれば、サッポーが「男のように」女性たちを愛したの

で、古代ローマの詩人ホラティウスによって「男のようなサッポー」と呼ばれたという。

Erynnna was the concubine of Sappho...who it is said she used libidinously.... Ovid indicates that her poems were lascivious.... [S]he did not fail to love [them] in the manner of a man, but was with other women a tribade, this is abusing them by rubbing, for tribein [Greek] is to rub, which we say according to Juvenal and Martial, and she was named by Horace *mascula Sappho*....

(qtd. in Andreadis 29 – 30)

ホラティウスがサッポーの詩的才能を賞賛する際に用いた有名な言葉 (test. 34) が、ここで彼女の同性愛行為と結びつけられていることに注目したい。詩人として「男のような」才能を持つサッポーとは性的に「男のような」女性。「男のような」という形容詞が誉め言葉でないことは明らかだ。パオーンに恋をする前のサッポーは、社会が求める女性像とは違う者、女性の本来の領域から外れた者、特別で異常な者なのである。このイメージは、のちに女性が同性愛者であることと女性が詩人であることを同一視し、ともに抑圧し、排除する伝統をもたらすことになる。

とはいって、ルネサンス時代のサッポーは、どちらかと言えば知的な女性としての名声を得ていたと言える。たとえば、15世紀はじめのフランスではクリスティヌ・ド・ピサンがサッポーの詩的な名声を傷つけるようなことは何も言及せずに、知的な女性としてのサッポーを讃え、16世紀になるとルイズ・ラベがサッポーを女性詩人が目指すべきモデルとして賞賛したが、イギリスでも、古典学者の一人であるトマス・モアはプラトンによってサッポーが「第10番目の詩神」と呼ばれたことをラテン語とギリシャ語で引用したし、のちには劇作家ジョン・リリーがエリザベス一世の面前で上演した喜劇『サッポーとパオ』(1584)において、サッポーをエリザベス女王のように王家の生まれで、学識があり、かつまたパオ（エリザベス一世に求愛していたダラーンソン伯爵を暗示）へのエロティックな情熱に打ち勝ち、処女を守った貞淑な女性として描いていた。

16世紀にはまた、サッポーの「断片1」を引用したハリカルナッソスのディオニュシオスの『統語論』や彼女の「断片31」を引用したロンギノスの『崇高について』がイタリアで印刷されはじめ、フランスではサッポーの他の断片詩も収めたギリシャの抒情詩人集なども出版された。イギリスにおけるサッポーの詩の出版はそれよりかなり遅く1695年である (Andreadis 38)。

しかし、彼女の詩はそれ以前からイギリスの知識階級の間でもよく知れ渡っていた。たとえば、17世紀はじめにジョン・ダンは、サッポーの書簡の相手を男性のパオーンではなく女性のピラエニス（この名前は古代ローマ詩人のマルティアリスが描いた両性愛者として有名な女性から採られたと推定されている）に設定した詩「ピラエニスに宛てたサッポーの手紙」を書いたが、その16行目“when gods to thee I do compare”は明らかにサッポーの「断片31」の“That man is equal to the Gods”的影響を受けている。ちなみに、「断片31」は、同性愛者として伝わっていたサッポー像を裏づけるかのように、語り手の女性が他の女性に対する愛を唄った詩である。ダンの詩におけるサッポーも同性愛詩人で、詩の言葉がどこから生じるのかを真剣に探っている。

しかしながら、16世紀中旬頃からオウイディウスの『名高き女たちの手紙』の英訳版が続々と出版されて彼のサッポー像が広く世間に行き渡るにつれ、詩人サッポーの名譽にかけりがでてきた。つまり、ラテン語の素養のある限られた知識人（主として上流の男性たち）しか知らないかった同性愛者サッポーとしてのイメージの方がクローズアップされたのである。オウイディウスの英訳版の推移を見てみると、いかに女性の同性愛がキリスト教上の罪として抑圧されていき、語るものもばかれるものになっていったかがわかる。たとえば、先に引用したオウイディウスのラテン語の箇所は、1567年のジョージ・ターバヴィルの英訳ではこうであった。

Nor Atthis, as she did of yore,
allures these eyes of mine.
Ne yet a hundreth mo
whom (shame ylaid aside)
I fancide erste....

しかし、1639年のジョン・シャーバンの英訳では、ターバヴィルで「恥辱」として言及されていたサッポーの同性愛が、次のように「私の罪」にされた。

Vile Althis, once most gratefull in my sight,
And hundreds more with whom my sins are knowne.

1707年のポープの英訳では、サッポーの同性愛の相手の数や具体的な名前すら消され、ただ単にこうである。

No more the Lesbian dames my passion move,
Once the dear objects of my guilty love....

オウイディウスの影響力はさらに旅行書にまで及んだ。たとえば、ニコラス・ド・ニコレイの『トルコ航海記』の英訳（1585）は、トルコの女性たちが公衆浴場に一緒にに入る慣習を次のように描写した。

[S]omtimes they do go 10. or 12. of them together, & somtimes more in a company aswel Turks as Grecians, & do familiarly wash one another, wherby it commeth to passe that amongst the women of Levan[t], ther is very great amity proceeding only through the frequentation & resort to the bathes: yea & somtimes become so feruently in loue the one of the other as if it were with men, in such sort that perciuing some maiden or woman of excellent beauty they will not creaste[sic] vntil they haue found means to bath with them, & to handle & grope them euery where at their pleasures, so ful they are of luxuriosness & feminine wantonnes: Euen as in times past wer the Tribades, of the number wherof was Sapho the Lesbian which transferred the loue wherwith she pursued a 100. women or maidens vpon her only friend Phaon.

(Nicholas de Nicholay, *Nauigations into Turkie* [1585] 60)

ここでは、トルコの女性たちがお互いに体を洗いあうことによって、「あたかも男性たちとのように」同性と愛し合うようになること、そして、そのような女性同性愛者たちを意味する“Tribades”的存在として、サッポーの名が挙げられている。このサッポーは、彼女の同性愛の相手として「100人」という数が示されているように、明らかにオウイディウスが描いたサッポーである。

17世紀末までの旅行記には、このように女性同性愛を東方のトルコの女性たちの奇妙な習慣として紹介するものが多かった。歴史上のサッポーの生地とされるレスボス島は現在のトルコ沿岸沖にあるので、トルコの習慣の話はもっともらしく聞こえる。しかし、旅行記が常に真実を記しているとは限らない。キャサリン・パークによれば、「性的異常を別の種族や大陸の女性たちのエキゾチックな肉体に投影することは、初期近代ヨーロッパ地誌文学によく見られる文彩だった」(Park 172–73)。旅行記は女性同性愛の存在を遠い東方のトルコに追いやることによって、西洋社会か

らその存在を排除するのに一役買っていたのだ。

当時の旅行記にはまた、女性同性愛者を東洋化する傾向に加えて、差別的な階級意識も見られた。たとえば、アウグエリウス・ギスレ＝ウス・ブスペクティウスのラテン語の『トルコ旅行記』(1589)は各國語で再版を重ね、英訳版は1694年になって初めて出た本だが、この中には、トルコの公衆浴場で同性愛にふける女性は「庶民」であり、家に風呂がある貴族階級の女性ではないと記されている。17世紀のイギリスの読者層はほとんどが貴族だったので、遠い異国、しかも庶民階級の女性の同性愛の話を自分たちとは関係のない話として楽しんだことは想像に難くない。

それでは、異性愛者としてのサッポーの方の評判はどうであったろうか？女性の同性愛がアノーマルなら、異性愛はノーマルのはずだ。だが、実際は、パオーンに対する愛を赤裸々に訴えるサッポーもみだらな女性として批判の対象だった。能動的な男性に対し受動的な女性という愛の場面における二分法は古来から現代まで根強く生きているが、特にキリスト教下では、憤りのある女性は決して自分から愛を訴えたりはしない、みだらな売春婦だけが積極的になるのだと考えられていた。それ故、ウィリアム・ボズワースは死後出版の『貞淑な恋人たちと堕落した恋人たち』(1651)中の「パオーンとサッポーの物語」で、オウイディウスの詩を書き換えて、異国の騎士パオーンが若き詩人サッポーから熱烈なモーションをかけられた様を描いたとき、パオーンにこう批判させたのである。

“Immodest girl,” he said, “why art so rude
To woo? when virtuous women should be woo’d,
And scarce obtain’d by wooing.”

(William Bosworth, *The Chast and Lost Lovers* [1651])

アレグザンダー・ラドクリフの『オウイディウスの滑稽詩』(1681)中の「パオーンに宛てたサッポーの手紙」では、サッポーはバラッド歌手であり、パオーンは彼女のコーラス仲間であると同時に恋人である。パオーンが彼女の指輪とベチコートを盗んで逃げ出したので、返してくれなければ屋根裏部屋から飛び降りて死んでやる、と脅す手紙の中で、ラドクリフのサッポーはオウイディウスのサッポー以上に淫らな言葉を連ねている。

You kiss’d me hard, and call’d me Charming witch,
I can’t do’t now, if you wou’d kiss my Breech.
Then you not only lik’d my airy Voice,

But in my Fleshly part you did Rejoice;
And when you clasp'd me in your brawny clutches,
You swore I mov'd my Body like a Dutchess;
You clap'd my Buttocks, o're and o're agen,
I can't believe that I was crooked then.
(Alexander Radcliffe, *Ovid's travestie* [1681])

看過できないのは、このように女性に対しては無論のこと、男性に対してもみだらであるという汚名にまみれたサッポーが、17世紀の終わりになると、知的な女性に対して攻撃するコンテクストにおいても批判されるようになったことである。ウィリアム・ウォールシュの『女性たちに関する対話』(1691)は、「女性の擁護」という副題がついているが、実はそれとは正反対の内容だ。「知性ある女性たち」についての話題を取り上げたとき、「女嫌い」(Misogynes)という名前の登場人物は、一体そんな女がどこにいるだろうか、3000年の間にたった三人の知性ある女性がいたというだけで、女に知性があると言えるか、いや、女が知性的だとどういう結果になるか、と論を進める。そして、三人の女性のうちの一人サッポーを「情欲の仕事」においては、どの男性よりも「才気縦横」であるとし、次のように、批判する。

Sappho, as she was one of the wittiest Women that ever the World bred, so she thought with Reason it wou'd be expected she shou'd make some additions to a Science in which all Womankind had been so successful: What does she do then? Not content with our Sex, she begins Amours with her own, and teaches us a new sort of Sin, that was follow'd not only in *Lucian's* time, but is practis'd frequently in *Turkey* at this day.
(William Walsh, *A Dialogue Concerning Women, Being a Defence of the Sex* [1691])

ウォールシュの「女嫌い」が暗示しているのは、同時代のトルコにおける同性愛の風習と、紀元後2世紀のルキアノスの『遊女の対話』である。ルキアノスの本では、一人の遊女がもう一人の遊女に対して、次のようにレスボスの女性との情事の詳細について尋ねていた。

We hear strange things about you, Leaina — that the rich woman from Lesbos loves you as though she were a man and that you live together and do heaven knows what with each other.... They say that in Lesbos there

are masculine-looking women who refuse to have intercourse with men, but who want to be with women as if they themselves were men.

(Lucian, *Dialogues of the Courtesans* 5)

ここでは、レスボスの同性愛の女性たちが「男性のような外観」であり、「あたかも男性のように」他の女性を愛すると記される。すでに見てきたオウイディウスの詩についてのルネサンス期の注釈や17世紀の旅行記でも明らかなように、女性同性愛者を男性として見なすのはルキアノス以来の伝統と言えるかもしれない。

しかし、ウォールシュの書いた本に戻れば、「女嫌い」という名前の人間は、サッポーは知性の点において女性としては例外的な、いわば「男性的」な女性だから、性的にも「男性的」であると規定している。これは、まさしく男性の領域で名を挙げた女性に対するセクシャル・ハラスメントであろう。ホラティウスの「男性のようなサッポー」には男性に匹敵する詩的能力を示すサッポーに対し、驚愕はあれど軽蔑の色合いはなかった。ところが、「女嫌い」は、知性において「男性のような」サッポーをこき下ろすために、彼女の性癖を取り上げたのである。さらに上記の引用で看過できないのは、サッポーが「男だけでは満足できなくて、同性とも情事をはじめ、われらに新しい種類の罪を教えている」と、現在形で書かれていることだ。これはルキアノスの時代のような遠い過去ではなく、トルコのように遠方の国でもなく、現在のイギリスにおいて、サッポーのように知的な女性が他の女性たちに「新しい種類の罪」を教え込むことに対する恐れを暗示していよう。「新しい種類の罪」とは何も女性の同性愛だけを指すのではない。いや、むしろ、「女嫌い」が警戒したのは、知性という「新しい種類の罪」がイギリスの女性たちの間に広がることであった。女性が知性の分野に進出するということは、男女間の上下の社会的秩序を攪乱することを意味するのだから。

III

実際、「女嫌い」の警戒もしくは恐れは現実のものだった。イギリスの女性たちはそれまで長い間一部の貴族階級出身者を除き、ものを書くという知的生産をしなかったし、また、知的生産には不適であると見なされていた。しかし、17世紀中旬頃から女性たちは詩や劇やロマンスを出版し始めたのである。これまで知的活動を一手に引き受けてきた男性たちにとって、女

性作家の登場は自分たちの特権的な地位を脅かすものとして映ったに違いない。18世紀初期の女性詩人アン・フィンチが次のように述べているように。

Alas! a woman that attempts the pen,
Such an intruder on the rights of men,
Such a presumptuous creature is esteemed,
The fault can by no virtue be redeemed.
(qtd. in Spencer 5)

さらに、サッポーが愛の詩、それも女性に対する愛の詩を書いたならば、イギリスの初期女性作家たちも女性間の愛をテーマにすることがよくあった。その多くはエロティックでない女性の友情を扱っていたが、中にはアフラ・ペーンの『美しきクラリンダへ—私を愛した、女性以上の存在と想像される人』(1688)のように、女性との性愛を唄う詩もあった。ペーンはその他にも多くのエロティックな詩や劇などを精力的に出版したプロの作家であり、かつまた両性愛者ジョン・ホイルの愛人としての私生活もよく知られていたので、その不道徳性が危険視されたが、他の女性作家の作品にも別の意味で（男性側にとって）危険なものが潜んでいた。たとえば、マーガレット・キャヴェンディッシュは『快楽の修道院』(1668)において、世間から隔離された女性だけのユートピアを描いたが、そこに集う女性たちはみな、男性中心の社会において女性の地位が奴隸状態であることに対して反乱を起こした者たちであった。また、メリ・アステルは『女性たちへの大事な提言』(1694)を「同性を愛する女性」("a Lover of her Sex")という匿名で出版し、未婚の女性たちに対して財政的な支援をする女性共同体を確立すべきだと訴えた。このように、キャヴェンディッシュやアステルの描く女性間の愛はフェミニズムの萌芽を宿していたのである。

「サッポー」の名前が女性詩人や作家の別名として頻繁に使われるようになったのはこの頃である。その名前は、一方では、女性の優れた能力を讃めるときに、他方では、それを貶め批判するときに用いられたが、前者の場合でも、そこには根強い女性蔑視の思想が潜んでいた。17世紀後半から18世紀中旬まで「イギリスのサッポー」として名を轟かせていたキャサリン・フィリップスがいい例だ。彼女には、「ロザニア」とか「ルーカシャ」のように女性の友人たちとの友情を唄った詩があるので、最初の女性詩人たるサッポーを連想させたのも無理はない。しかし、フィリップスはプロの作家として悪名を馳せたペーンと違って、生前中

は自分の詩を出版せず、手書き原稿のまま友人の間に回していただけであり、私生活上も貞淑な女性として知られていた。つまり、フィリップスは詩人であったけれども、男性の領域である公の場に侵入することをしないで、社会が女性に求める役割に忠実な女性だったのである。フィリップスが賞賛されたのはまさにこの点だ。彼女に対する賞賛の声はいつも「サッポー」という名前によって喚起される不名誉なイメージ、すなわち淫らな女性とか同性愛者のイメージを払拭する声を伴っていた。たとえば、サー・チャールズ・コットレルは、死後出版されたフィリップスの『詩集』(1667)の序の中で、彼女を古代のサッポーのような才能を持つ詩人として褒め称えたが、同時に「美德」の点では古代のサッポーに勝っているとわざわざ記した推奨文を書いている。引用中の「オリンダ」とはフィリップスのペン・ネームである。

We might well have call'd her the English *Sappho*, she
of all the female Poets of former Ages, being for her
Verses and her Virtues both, the most highly to be val-
ued.... And for her Virtues, they as much surpass'd
those of *Sappho* as the Theological do the Moral,
(wherein yet *Orinda* was not her inferior).
(Sir Charles Coterell, in Katherine Philips, *Poems*
[1667])

同様に、エイブラハム・カウリーも次のように、「オリンダ」がサッポーの不名誉な同性愛と連想されることに対する懸念を示し、彼女がいかにつつましく貞淑であるかを強調した。

They talk of *Sappho*, but, alas! the shame
Ill Manners soil the lustre of her fame.
Orinda's inward Virtue is so bright,
That, like a Lantern's fair enclosed light,
It through the Paper shines where she doth write,
Honour and Friendship, and the gen'rous scorn
 Of things for which we were not born,
(Things that can only by a fond disease,
Like that of Girles our vicious stomacks please)
Are the instructive subjects of her Pen.
(Abraham Cowley, in Katherine Philips, *Poems* [1667])

18世紀になると、汚名にまみれた古代のサッポーの名譽も回復しようとする動きが出てきた。ジョーゼフ・アディソンが評論誌『スペクテーター』(1711)に

において、サッポーが実は貞淑な女性だったとする論文を掲載したり、アンブロース・フィリップスによる「断片31」などのサッポーの詩の英訳を掲載するなどしたのである。それでもアディソンはサッポーの詩について語るとき、次のように読者に警告するのを忘れなかった。

I do not know, by the Character that is given of her Works, whether it is not for the Benefit of Mankind that they are lost. They were filled with such bewitching Tenderness and Rapture, that it might have been dangerous to have given them a Reading.

(Joseph Addison, *Spectator* 223, 15 Nov. 1711)

当時の読者にとって、読むのに危険なほどの「魅惑的な愛情や恍惚」に満ちたサッポーの詩については、同性愛を唄った「断片31」を見ただけで充分であろう。アディソンによる詩人サッポーの再評価は、巷に流れていた彼女の不名誉な評判を完全に打ち消すには弱かった。フィリップスは18世紀中旬になっても賞賛されたが、それは「貞淑なサッポー」としてエロティックでない女性の友情を描いたからだ。ジョン・ダンカムが『女性贊歌』(1754)においてなしたフィリップス贊歌は、一世紀前のカウリーの表現を想起させるものである。

Nor need we now from our own Britain rove
In search of genius, to the Lesbian grove,
Tho' Sappho there her tuneful lyre has strung,
And amorous griefs in sweetest accents sung,
Since her, in Charles's days, amidst a train
Of shameless bards, licentious and profane,
The chaste ORINDA rose; with purer light,
Like modest Cynthia, beaming thro' the night:
Fair Friendship's lustre, undisguis'd by art,
Glows in her lines, and animates her heart;
Friendship, that jewel, which, tho' all confess
Its peerless value, yet how few possess!

(John Duncombe, *The Femeniad* [1754])

同種の賞賛のやり方は他の女性詩人に対しても見られる。たとえば、リットルトン卿は、エリザベス・カーターをこう褒め称えた。

Greece shall no more
Of Lesbian Sappho boast, whose wanton Muse,
Like a false Syren, while she charm'd, seduc'd
To guilt and ruin....
(Lord Lyttleton, "On Reading Mrs Carter's Poems in Manuscript" [1765])

アナ・エイキンも、エリザベス・ローに同様の賞賛を送っている。

Such were the notes our chaster Sappho sung
And every Muse dropped honey on her tongue.
Blest shade! How pure a breath of praise was thine,
Whose spotless life was faultless as thy line
(Anna Aikin, "Verses on Mrs Rowe" [1773])

このように女性詩人を「貞淑なサッポー」として褒めちぎるということは、一瞥すると女性の詩的能力を称えているかに見えかもしれない。だが、実際はそうではなく、もはや女性詩人が古代のように例外的な女性として見なせないならば、男性や男性中心の社会にとって害が及ばないように、女性詩人や女性の詩の主題を道徳的に許される範囲にだけに限定したと言える。

しかし、こうした努力は逆説的に、当時いかにサッポーの悪名がとどろいていたかを示してもいよう。オウイディウスの詩「パオーンに宛てたサッポーの手紙」を英訳したポープはまた、サッポーの詩的名声を貶めると同時に、同時代の女性作家たちをこき下ろすための詩を書いている。彼が特に目のかたきにしたのは、メリ・ウォーティ・モンターギュ夫人であった。彼女が1716-18年に外交官の夫とトルコに旅行したとき書いた書簡形式の旅行記は、手書き原稿のまま回し読みされ、大評判になった。ポープもそれを読んで、「僕はサッポーの断片を楽しんだように、彼女 [モンターギュ夫人] の断片を楽しんだ」と絶賛した。しかし、二人の仲が政治的な立場の相違などによって断絶すると、ポープは自分の詩の中で彼女を「サッポー」として何度も登場させながら、彼女を汚くて、乱交にふけっていて、梅毒にかかり、うぬぼれが強い女として猛烈に攻撃し始めたのである。たとえば、モンターギュ夫人はトルコで行っていた“smallpox”（天然痘）の予防接種をイギリスで広めたことで有名で、友人たちにも予防接種したのだが、ポープはそれを次のように“pox”（梅毒に感染させられる）という語に引っかけて揶揄した。

Slander or Poison, dread from Delia's Rage,
Hard words or hanging, if your Judge be *Page*.
From furious *Sappho* scarce a milder fate,
P—x'd by her Love, or libell'd by her Hate.
(Alexander Pope, *Imitations of Horace, Book II, Satires I* [1733])

「ハーヴィ卿とメアリ・ウォートリ夫人へ」という詩では、モンターギュ夫人の道徳と外観が中傷されている。ハーヴィ卿とは彼女の友人であり、ポープとの間でお互いに激しく攻撃し合うパンフレット戦争があった人物である。

When I but call a flagrant Whore unsound,
Or have a Pimp or Flaterer in the Wind,
Sapho enrag'd crys out your back is round,
Adonis screams — Ah! Foe to all Mankind!

Thanks, dirty Pair! you teach me what to say,
When you attack my Morals, Sense, or Truth,
I answer thus — poor Sapho you grow grey,
And sweet Adonis — you have lost a Tooth.
(Alexander Pope, “To Ld. Hervey & Lady Mary Wortley”)

ポープは他の女性たちも「サッパー」と呼んで誹謗した。たとえば、アン・フィンチ・ワインチルシー夫人は「アーデリア」の名前で詩集を出版し、サッパーの「断片55」をモデルにした詩を書いているが、ポープは「ワインチルシー夫人への即興詩」の中で、こう断言する。

In vain you boast poetic names of yore,
And cite those Sappho's we admire no more:
Fate doom'd the fall of ev'ry female wit,
But doom'd it then when first Ardelia writ.
Of all examples by the world confess,
I knew Ardelia could not quote the best;
Who, like her mistress on Britannia's throne;
Fights, and subdues in quarrels not her own.
To write their praise you but in vain essay;
Ev'n while you write, you take that praise away:
Light to the stars the sun does thus restore,
But shines himself till they are seen no more.
(Alexander Pope, “Impromptu to Lady Winchilsea”)

「サッパー」の名前をめぐる中傷はポープ以外からも出ていた。ウィリアム・キングの批判の対象はフランセス・ブリューデネル・ニューバラ公爵夫人である。彼は多額の借金を巡る裁判で彼女に負けたので、復讐するために、「祝杯」(1736)という詩の中で彼女を女性グループのリーダーの「ミラ」として登場させ、彼女の友人のアレン夫人を「ミラの愛人」として嘲笑した。次の引用中の“*Imp*”(小鬼)とはアレン夫人のことである。

... in-crawl'd her own *Imp*
In a scaly small Body, contors'd like a Shrimp.
In a Rapture she stroak'd it, and gave it the Teat,
By the Suction to raise sympathetical Heat.
Then by *Hecate* she swore, *she was sated with Men*;
Sung a wanton *Sapphoic*, and stroak'd it agen...
(William King, *The Toast* [1736])

1749年に出版され、大評判になった作者名不明の『サタンの収穫祭——売春、姦通、私通、売春婦斡旋、ポン引き、ソドミー、女性同性愛の現況（真正の娯楽物語による例証）、及びプロテスタントの我が王国にて日々増殖するサタンの書物』では、前に見てきたウォールシュの『女性たちに関する対話』を一字一句忠実に再録したあとで、ロンドン郊外のトウィックナムにおいても「新しい種類の罪」が行われていることを明らかにしている。

Not content with our Sex, begins *Amours* with her own, and teaches the Female World a new Sort of Sin, call'd the *Flats*, that was follow'd not only in Lucian's Time, but is practis'd frequently in *Turkey*, as well as *Twickenham* at this Day.
(Anonymous, *Satan's Harvest Home :Or, the Present State of Whorecraft, Adultery, Fornication, Procuring, Pimping, Sodomy, and the Game at Flatts (Illustrated by an Authentick and Entertaining Story), and other SATANIC WORKS daily propagated in this good Protestant Kingdom* [1749]18)

当時の人々がトルコとトウィックナムの地名で思い起こすのは、ポープによって何度も「サッパー」として中傷されたモンターギュ夫人である。彼女はトルコ旅行記を書き、トウィックナムに住んでいたし、オックスフォード夫人のような貴族階級の女性たちや「女性たちへの大事な提言」を著したメアリ・アステルと

親しく述べてはいた。だが、実際に同性愛者であつたかは不明だ。しかし、事実がどうであれ、『サタンの収穫祭』の著者にとって、モンターギュ夫人やその女友達たちの存在はウォールシュが警戒していた「新しい種類の罪」がまさにイギリス国内にまで蔓延していることの証左であったのである。同書はまた、その副題が示すように、女性同性愛を含むあらゆる種類の性的放縱や悦脱のかたちを攻撃するだけでなく、それらが扇動的な書物によって読者の間に広がることを阻止する目的をもっていた。扇動的な「サタンの書物」とはモンターギュ夫人のような女性の手によるものであり、想定する読者は女性のことを指していることは言うまでもない。

IV

このように、18世紀には、女性作家や独立心の強い女性を攻撃する際、性的にみだらとか同性愛者だとするのはほとんどクリシェになっていたと言える。そして、女性詩人や作家を道徳的な観点から評価するのもクリシェになっていた。フィリップスが「貞淑なサッポー」として賞賛すべき詩人であるならば、モンターギュ夫人は性的秩序を搅乱する「みだらなサッポー」として危険視された。世紀の終わりには、フランス革命に触発されたメリ・ウルストンクラフトをはじめとする女性作家たちがイギリス国内で女性の権利とか自由を訴え始めたが、その時も保守派の男性作家たちは彼女らを「男のような女たち」(“unsexed females”)とか性的に奔放な女性として痛烈に批判した。しかし、その一方で、ハナ・モアのように、女性の伝統的な役割——受動的で弱々しい女性——を薦める女性作家たちを「女らしい女性」として賞賛したのである。男性中心の社会や男性にとって危険な女性を「男」として排除するにせよ、危険でない女性を「女」として受け入れるにせよ、こうした態度はまさに、才能ある女性に対する男性側の嫌悪や偏見の産物であろう。18世紀に伝わっていたサッポー像はいかに女性が知的で創造的な仕事につくことが困難であったかを体言していたと言える。

References

- Addison, Joseph. *The Spectator*. Ed. Donald F. Bond. Oxford: Oxford UP, 1965. Vol. 2.
- Andreadis, Harriette. *Sappho in Early Modern England: Female Same-Sex Literary Erotics 1550–1714*. Chicago and London: U of Chicago P, 2001.
- Anonymous. *Satan's Harvest Home* (1749) and *Hell upon Earth: or the Town in an Uproar* (1729). New York: Garland, 1985.
- Barnstone, Willis, trans. *Sappho and the Greek Lyric Poets*. Introduction by William E. McCulloh. New York: Schocken, 1988.
- Brown, Susan. “A Victorian Sappho: Agency, Identity, and the Politics of Poetics.” *English Studies in Canada* 20(1994): 205–25.
- DeJean, Joan. *Fictions of Sappho, 1546–1937*. Chicago and London: U of Chicago P, 1989.
- Donne, John. *Poetical Works*. Ed. Herbert J. C. Grierson. Oxford: Oxford UP, 1971.
- duBois, Page. *Sappho is Burning*. Chicago and London: U of Chicago P, 1995.
- Grahn, Judy. *The Highest Apple: Sappho and the Lesbian Poetic Tradition*. San Francisco: Spinsters Ink, 1985.
- Greene, Ellen, ed. *Reading Sappho: Contemporary Approaches*. Berkeley: U of California P, 1996.
-, ed. *Re-Reading Sappho: Reception and Transmission*. Berkeley: U of California P, 1996.
- Greer, Germaine. “The Enigma of Sappho.” *Slipshod Sibyls: Recognition, Rejection and the Woman Poet*. London: Viking Penguin, 1995.
- Grundy, Isobel. *Lady Mary Wortley Montagu: Comet of the Enlightenment*. Oxford: Oxford UP, 1999.
- Gubar, Susan. “Sapphistries.” *Signs* 10(1984): 43–62.
- Harvey, Elizabeth. “Ventriloquizing Sappho, or the Lesbian Muse.” *Ventriloquized Voices: Feminist Theory and English Renaissance Texts*. London and New York: Routledge, 1992.
- Lardinois, André. “Lesbian Sappho and Sappho of Lesbos.” *From Sappho to De Sade: Moments in the History of Sexuality*. Ed. Jan Bremmer. London and New York: Routledge, 1989.
- Leighton, Angela. *Victorian Women Poets: Writing Against the Heart*. Charlottesville and London: UP of Virginia, 1992.
- Lightman, Marjorie, and Benjamin Lightman. *Biographical Dictionary of Ancient Greek and Roman Women: Notable Women from Sappho to Helena*. New York: Checkmark, 2000.
- Lipking, Lawrence. *Abandoned Women and Poetic Tradition*. Chicago and London: U of Chicago P, 1988.
- Llyl, John. *Sappho and Phao*. Ed. David Bevington. Man-

- chester and New York: Manchester UP, 1991.
- Nicolay, Nicolas de. *Nauigations into Turkie*. 1585. Trans. T. Washington the younger. Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum; New York: Da Capo P, 1968.
- Ovid. *Heroides and Amores*. Trans. Grant Showerman. LCL 41. 2nd ed. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1977.
- Park, Katharine. "The Rediscovery of the Clitoris: French Medicine and the Tribune, 1570–1620. *The Body in Parts: Fantasies of Corporeality in Early Modern Europe*. Ed. Carla Mazzio and David Hillman. New York: Routledge, 1997. 171–93.
- Polwhele, Richard. *The Unsex'd Females: A Poem, Addressed to the Author of the Pursuits of Literature*. 1798. London: Garland, 1974.
- Pope, Alexander. *Poetical Works*. Ed. Herbert Davis. Oxford: Oxford UP, 1966.
- Prins, Yopie. *Victorian Sappho*. Princeton: Princeton UP, 1999.
- Rayor, Diane J., trans. *Sappho's Lyre: Archaic Lyric and Women Poets of Ancient Greece*. Foreword by W. R. Johnson. Berkeley: U of California P, 1991.
- Reynolds, Margaret, ed. *The Sappho Companion*. New York: Palgrave, 2001.
- Roche, Paul, trans. and essay. *The Love Songs of Sappho*. New York: Prometheus Books, 1998.
- Sappho and Alcaeus. *Greek Lyric*. Trans. David A. Campbell. LCL 142. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1982.
- Snyder, Jane McIntosh. *Lives of Notable Gay Men and Lesbians: Sappho*. New York: Chelsea House, 1995.
- *Lesbian Desire in the Lyrics of Sappho*. New York: Columbia UP, 1997.
- Spencer, Jane. *The Rise of the Woman Novelist from Aphra Behn to Jane Austen*. Oxford: Basil Blackwell, 1986.
- Vanita, Ruth. *Sappho and the Virgin Mary: Same-Sex Love and the English Literary Imagination*. New York: Columbia UP, 1996.
- Williamson, Margaret. *Sappho's Immortal Daughters*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1995.